主体的・対話的で深い学びをめざした英語授業の構築

―協働学習を取り入れた実践を通して―

1　主題設定の理由
2　研究のねらい
3　研究の方法
4　研究の実際
5　研究の成果
6　今後の課題

第２分科会
外国語教育
Ｂ　中学校・高校

青木　龍一　　（一宮・萩原中）

研究の概要報告

１　県内の自主的な研究活動の取組状況

将来，国際社会においてたくましく活躍できる子どもたちの育成をめざして，英語科では「積極的にコミュニケーションをはかろうとする態度」や「聞くこと・話すこと（やりとり）・読むこと・書くことの４技能５領域を総合的に活用できるコミュニケーション能力の基礎・基本」を最重要課題としてとりくんできた。この主旨をふまえ，本年度の教育研究愛知県集会でも，さまざまな工夫をした実践をもとに，創意あふれる 21 本のリポートが提出された。

中間交流や振り返りを取り入れた言語活動の工夫や，ペア音読を発展させた領域統合型の活動の工夫，ＩＣＴを活用して他校や海外の児童生徒とのコミュニケーションの場の設定をする実践などが報告された。また，教科横断的な学習や協働学習を重視した授業実践も多くみられるなど，県内の小中学校において，新学習指導要領を意識した授業にとりくんでいる様子が伝わった。

２　今次県集会でみられた主要な課題

今次の県集会で提出されたリポートは「主体的に学習にとりくむ態度を育む指導のありかた」「コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のありかた」「思考力・判断力・表現力を育む言語活動のありかた」と３つの実践に大きく分類された。

「主体的に学習にとりくむ態度を育む指導のありかた」では，他校や他学級児童との英語を通したかかわりの場を設定することで相手意識や学習意欲を育む小学校の実践や，ペア・グループによる協働学習の工夫を通して生徒の主体性を引き出す中学校の実践が報告された。

「コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のありかた」では，コミュニケーションをする上での４つの視点を示すことで，児童に楽しく英語を表現させる実践があった。また，生徒が自己表現をしたくなるような課題を設定した上で，自己評価やペア・グループによる相互評価を取り入れた実践もあった。

「思考力・判断力・表現力を育む言語活動のありかた」では，ＡＥＴに自分のよさや日本のよさを伝える活動を通して，自分の感情を根拠とともに詳しく伝え合う双方向の会話をめざす実践や，Skype を使って海外の生徒とリアルタイムで交流をする実践報告が行われた。

３　今後の課題

新学習指導要領完全実施を受けて，３観点による学習評価，小・中連携の必要性，即興性を身に付けさせるための工夫，ＩＣＴのさらなる活用など，外国語活動，英語教育や学校教育にかかわる課題はさまざまである。どのような子どもを育てていくかを常に意識し，よりよい指導を重ねることが重要である。今回報告された研究の成果や課題をふまえ，今後も子どもを中心にすえた有意義な実践に継続的にとりくんでもらいたい。

（矢後　智子・橋本　義武）

報 告 書 の で き る ま で

わたくしたちはそれぞれの学校で，子どもたちの健やかな成長を願い日々の教育活動にとりくみながら，自主的・主体的に実践研究を行っている。この報告書は，「学びの質を追究するとともに，子どもたち一人ひとりの意欲を大切にし，学ぶ喜び・わかる楽しさを保障する教育課程編成活動をすすめる」という愛知県の教育研究活動の重点項目をふまえ，継続して行ってきた実践の成果をまとめたものである。教組ごとの研究集会の分科会における実践報告と研究協議を経て，県の研究集会の分科会には 21 本のリポートが提出された。「わかる授業・楽しい学校」をめざし，子どもたち一人ひとりの主体的・対話的で深い学びを実現するための工夫がどのリポートからもみられた。新型コロナウイルス感染症予防のために WEB 開催になったが，参加者の間では意見交換や質疑応答が積極的に行われ，助言者の先生方からは的確なご指導やご助言をいただき，充実した研究集会になった。

助　　言　　者	矢後　智子（名古屋外国語大学）	橋本　義武（知教連・篠島小）
教育課程研究委員	宮代　宰　（名古屋・森孝西小）	小林　耕輔（西尾・平坂中）
	加藤　直樹（稲沢・明治中）	堀本　尚宏（名古屋・上社中）
	稲垣　徹哉（小牧・桃陵中）	加藤　渡　（岡崎・東海中）
	芝田　広幸（名古屋・前津中）	浦田　将夫（海部・蟹江北中）
	佐藤　公哉（稲沢・大里東小）	

１　主題設定の理由

日本のみならず世界全体のグローバル化が急速にすすみ，将来の予測が不可能な社会において，子どもたちは課題や問題に直面したり，それらを見出したりしたときに，自らで方法を見つけ，解決する力が必要となってくる。そのため，学校教育では，知識や技能を活用して，積極的に問題を解決する力や態度を身につけなければならない。そして，他者と交流し，協働していくことで，より創造的な解決策が見つけることができると考える。そのためにも，子どもたちが主体的に学ぶ姿勢を身につけ，他者と対話し協働する「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業を展開していくことが大切である。また，「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには，ペア学習やグループ学習が欠かせない。生徒どうしが互いに教え合い，意見述べ合わせることで，教員以外の他者から学ばせることができる。他者の意見と自分の意見を比較することで，新たな発見があったり，より深い理解が生まれたりすると考える。英語科の授業について，詳細な生徒の実態をとらえるために，４月に本校３年生３学級 106 人に対して英語科に関するアンケート調査を行った。アンケートの結果から，英語に対して「とても好き」19%，「どちらかといえば好き」52%という肯定的評価の生徒が多かった。「まったく好きではない」，「あまり好きではない」と回答した生徒に対する「なぜ好きではないのか」という質問には，「解説されても文法を理解できない」，「単語が覚えられない」といった回答が得られた。また，「学校の授業内容を理解していますか」という質問に対して，「ほとんどわかっている」25%，「どちらかといえばわかっている」27%で，約半数の生徒は英語の授業について「よくわからない」という意識をもっていることがわかった。文法説明や教科書の本文読解では，「講義形式の説明中心の授業」になりがちである。生徒は受け身の学習である講義形式の授業では，退屈な時間を過ごすことになる。さらに，説明を聞くことに飽きてしまえば知識など身につくはずもなく，理解に苦しみ，「英語はわからない」ということになってしまう。

中学校外国語科におけるこうした生徒の実態や新学習指導要領における外国語科の方向性をふまえ，本研究では，ペア学習やグループ学習を通して他者と交流し，協働して課題解決にとりくむ中で，意欲的に学習にとりくむ態度を育成したいと考え，本主題を設定した。

２　研究のねらい

（１）　めざす生徒像

「他者と交流し，協働して課題解決にとりくむ中で，意欲的に学習にとりくむ生徒」

（２）　研究の仮説

学習形態を工夫し、他者と協働する学習活動を行えば、知識の理解の質の向上につながり、すすんで学習にとりくむ生徒を育成することができるであろう。

３　研究の方法

研究の具体的な手だてとして，次の３点を考えた。

（１）＜手だて１＞　ペア学習による新出単語の定着

高い意欲をもたせて新出単語を定着させるために，各単元における導入時にペア学習を取り入れる。

①「Guessing」…パワーポイントを使用し，新出単語の意味の予測をする。新出単語に関する絵や英文を生徒に提示して，ペアになり「協働して予測」をし，意味の導入をする。

②「Matching」…新出単語とその日本語の二枚セットの紙を作成し，二人一組となって単語の定着活動を行う。一人の生徒が単語を発音しながら英語の紙を出し，もう一方の生徒がその意味の紙を，英語を発音しながら出す。

（２）＜手だて２＞　グループ学習による Key Sentence の学習

クラスの中で四人一組のグループを作り，一人が教員役となり，教室の一か所に集められる。そこで，単元の重要文法を確認しながら覚えて，グループの生徒役に教える準備をする。その後，グループに戻り，教え合い・学び合う活動をさせ，「他者と協働」させる場を設定する。

（３）＜手だて３＞　協働学習による教科書本文の内容読解

「ジグソー法」でのグループ学習を行う。教科書本文の段落ごとに「１段落グループ」「２段落グループ」「３段落グループ」「４段落グループ」を作る。全員が同じ内容を読むのではなく，各々のグループが異なる部分を読み，それをグループで最終的に総合する。他者との協働や対話を重ねていくことで,一人ひとりの理解･深化に有効であると考える。

４　研究の実際

（１）＜手だて１＞　ペア学習による新出単語の定着

①「Guessing」(NEW HORIZON English Course 3 Unit3 Scene①②)

高い意欲をもたせて新出単語を定着させるために，各単元における導入時にペア学習を取り入れた。活動内容は，以下のとおりである。

ア　まずは初見で単語の読み方を予測する。個人で考えた後，ペアで共有・確認をする。

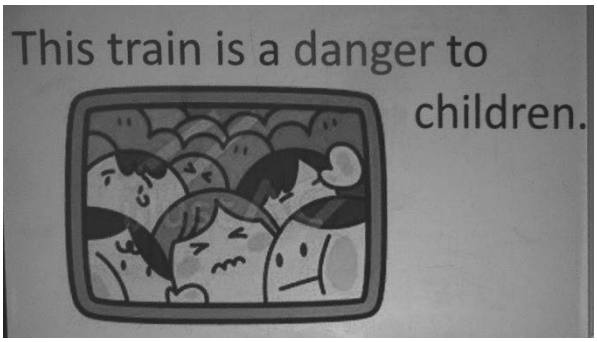
イ　生徒にとって身近にある絵や写真を示し，ペアで共有・確認する。

ウ　答え合わせはせず，その単語を使った英文を示し，ペアで共有・確認をする。

アの段階では，資料１の画面を生徒に示し，「どのように読むか」と投げかけたところ，「ダンゲー」「ダンゲロ」「ダンジャー」などよい反応はみられたが，正しい読み方で読むことは難しかった。しかし，資料２の画面を示したところ，多くの生徒たちの中で「デインジャーだ」と自信をもち，ペアどうしで共有し，話し合っている姿がみられた。そして，最後に資料３の画面を示し,「多くの人が意味を予測できていると思いますが，この文の意味はどうなるでしょうか」と投げかけ，ペアで確認をし，全体確認をした。そして，アイウの活動の後，ペアで音読活動を行った。単語や語句は文や文脈の中で具体的な意味を生じるため，導入の際にも文やパッセージの中で示すようにした。

（資料１　アの場面のスライド）

（資料２　イの場面のスライド）



（資料３　ウの場面のスライド）

（資料４　ペアでの音読練習の様子）

②「Matching」(NEW HORIZON English Course 3 Unit3 Scene①②)

二人一組となって単語の定着活動を行った。この活動は一斉の音読練習や意味の確認が終わった後の活動になる。２時限目以降も授業の開始後，約３分間を「Matching」の時間として位置づけ，定期的に単語の反復練習をして，定着させた。複数回行うと，単調な活動になってしまうため，「神経衰弱」や「書く活動」などカードの使い方を変えて行うようにした。生徒たちは毎回の授業でどのパターンでやるのか興味をもち，積極的に学習にとりくむことが出来ていた。ペアでの学習にすることで教え合い，学び合う姿がよくみられた。（資料５　ペア活動の様子 ）

上記二つの活動内容で新出単語の導入を行ったことで，自分で考え（主体的），相手に伝え，わからなければ教え合い，導き合い（対話的）学習にとりくみ，協働的に理解を深めることができた（深い学びの実現）。

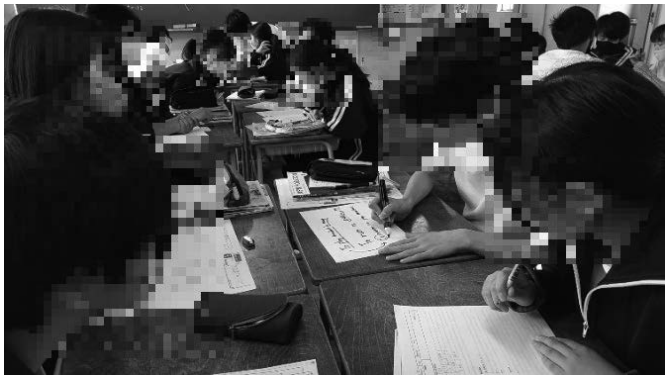
（２）＜手だて２＞　グループ学習による Key Sentence の学習

(NEW HORIZON English Course 3 Unit3 Scene①②，Read and Think①)

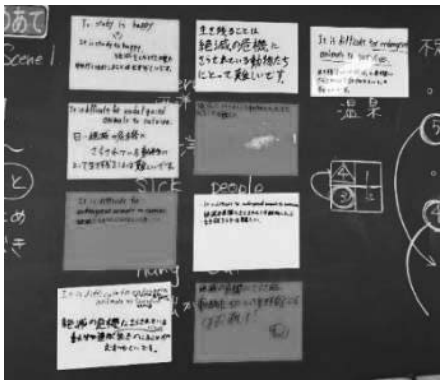
クラスの中で四人一組のグループを作り，一人が教員役となり，教室の一か所に集められる。そこで，その日に行う単元の Key Sentence に使われている新出文法を確認しながら覚えて，グループの生徒役に教える準備をする。（今回は Unit3 Scene1「It is important for us to understand the problem」）確認の際には，教員が介入し，その生徒たちに文法説明を行う。必要に応じて個々の質問には答えるようにする。

（資料６　教員役の確認場面）

この間にグループに残っている生徒三人は，Key Sentence が書かれた紙が配られ，新出文法がどのような意味なのかを，三人で予測を立てる。教員役は，自分が聞いたことをただ伝えるだけでなく，ヒントを与えながら生徒役が理解できるように導くように説明する。終わったら代表者を一人選び，その生徒が教員役として他のグループへ行き，自分たちが教え合ったことを再度他のグループで説明をする。そして，最後に教科書に出てくる新出文法の入った文，「It is difficult for endangered animals to survive in these conditions.」の意味をグループで考え，全体で共有し，まとめとする。



（資料７　グループ内で教え合う様子）



（資料８　全体で答えを共有した黒板）

（３）＜手だて３＞　協働学習による教科書本文の内容読解

（NEW HORIZON English Course 3 Unit3 Read and Think①②）

「ジグソー法」でのグループ学習を行う。まずは二人一組で担当する段落を分担して読む。まずは，ペアで理解を深めておく。新出単語の意味を調べ，本文の日本語訳，内容読解の問題にとりくむ。その後，同じ段落ごとに集まり，そこでそれぞれの意見を共有し，同じ学びをして，それを自分のグループで他の生徒に伝えるしくみである。グループの生徒と内容を読解するという目標達成のために協力，助け合い，貢献する姿がみられた。また，活動の中でそれぞれの生徒に責任が分散することで，リーダーの訓練にもつながり，主体性が高まったと考える。

＜ジグソー学習の方法＞

① ペアで担当パートを学習する。

②担当パートで集まり，理解を深める。

１段落	１段落	１段落	１段落	１段落	１段落
２段落 A	２段落	２段落 C	２段落	２段落 E	２段落
３段落	３段落	３段落	３段落	３段落	３段落
１段落	１段落	１段落	１段落	１段落	１段落
２段落 B	２段落	２段落 D	２段落	２段落 F	２段落
３段落	３段落	３段落	３段落	３段落	３段落
	３段落		３段落		３段落

A1 段落	A1 段落	C1 段落	C1 段落	E1 段落	E1 段落
B1 段落	B1 段落	D1 段落	D1 段落	F1 段落	F1 段落
A2 段落	A2 段落	C2 段落	C2 段落	E2 段落	E2 段落
B2 段落	B2 段落	D2 段落	D2 段落	F2 段落	F2 段落
A3 段落	A3 段落	C3 段落	C3 段落	E3 段落	E3 段落
B3 段落	B3 段落	D3 段落	D3 段落	F3 段落	F3 段落
	B3 段落		D3 段落		F3 段落

③ 最初のグループに戻り，互いに教え合う。

①協力して、新出単語の意味を調べよう。　②協力して、日本語訳を完成させよう。
③協力して、問題を解こう。④最後にほかのグループの人に解説しよう。

Aパート

population (　　)　rapidly (　　)　decrease (　　)

hunt (　　)　feather (　　)　development (　　)

destroy(ed) (　　)　environment (　　)

However, the population of ibises in Japan rapidly decreased.

(　　)、(　　)

People hunted them for their beautiful feathers, and development destroyed their environment.

(　　)、(　　)

It was difficult for them to survive.

(　　)

問題　①them が表すものは何？　　②なぜトキは生き残ることが難しいのか？

（資料９　活動で使ったワークシート）

（資料 10　協働作業の様子）

5　研究の成果

（1）＜手だて１＞　ペア学習による新出単語の定着

各単元後の単語テストの平均点は，資料 11 の通りである。一斉授業であった学習初期（Unit1 と Unit2）からペア学習をはじめ，後期（Unit3）には各クラス平均点は非常に伸びた。また，資料 12 のアンケート結果においてもどちらの学習形態が効果的であったかという問いに対してペア・グループ学習と回答した生徒が全体の約 70%である。また，ペア学習の実践をした後の感想を資料 13 に示した。英語の苦手な生徒は，感想にあるように，協力して意欲的に活動にとりくむことができ，理解を深めたようだった。また，学習意欲が低い生徒も，級友ととりくむことでモチベーションを高めることができた。以上のことから，この手だてが高い意欲をもたせて学習にとりくみ，新出単語を定着させることに有効だったことがうかがえる。

平均/総得点	Unit1	Unit2	Unit3
クラス A 得点率	34.2/40 点 85.5%	28.2/32 点 85.1%	**35.6/41 点** **86.8%**
クラス B 得点率	31.0/40 点 77.5%	26.0/32 点 79.2%	**33.7/41 点** **82.1%**
クラス C 得点率	31.2/40 点 78.0%	25.2/32 点 78.7%	**32.7/41 点** **79.7%**

（資料 11　各 Unit の単語テストの平均点）

	4月	8月
ペア・グループ学習	４０%	７０%
一斉学習	４５%	１０%
どちらともいえない	１５%	２０%

（資料 12　学習形態に関するアンケート結果）

「新出単語の学習でどちらの活動が効果的であったか」

友達やクラスメートと協力して学習することができた。
その時に覚えた単語は頭に残りやすかった。

ペア・グループ学習だと説明する側も相手に伝えようとすると自分の中で説明する事を整理して、おぼえることもできるし、説明をする側も、相手の伝えようとしている事を理解しようとする事で頭に残るので良いと思う。

（資料 13　英語を苦手と考える生徒のアンケート内容）

（2）＜手だて２＞　グループ学習による Key Sentence の学習

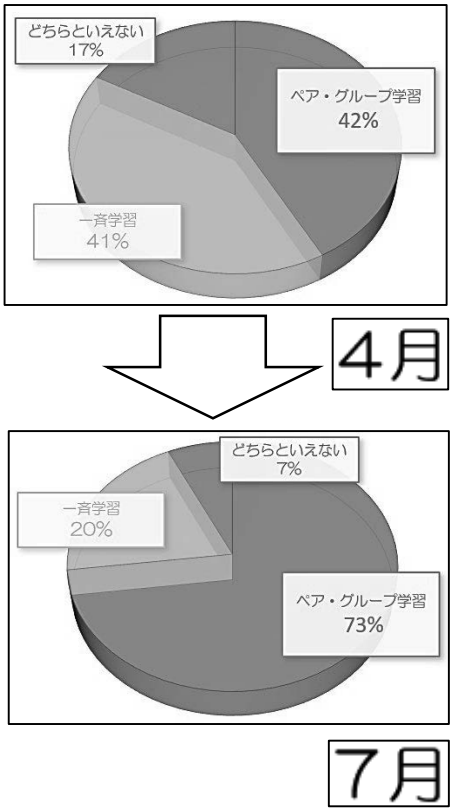
Key Sentence の学習では，他者との協働や対話を通じて，広げ，深めるためにグループ学習を取り入れた。資料 14 は学習後の生徒の感想である。協働的な学びによって，生徒どうしで学び合うことができたとわかる。一斉授業では，聞いているそぶりをして学びを怠ることが可能だが，グループ学習や別の班に説明することで，どの生徒も学びに参加することになる。また，理解度の低い生徒が質問しやすい環境づくりにもつながり，一人残らず学びの権利を保障することができた。理解度の高い生徒にも，わからない生徒への応答によって，「学び直し」「理解し直し」といった経験をさせることができた。わからない生徒だけではなく，わかっている生徒への恩恵も大きいと感じた。さらに資料 15 のアンケート結果においてもどちらの学習形態が文法理解につながり，やる気になったかという問いに対してペア・グループ学習と回答した生徒が全体の約 73%であることから，生徒の意欲を高め，理解を深めるために効果的な手だてであったと読み取ることができる。

4人グループで、話しやすいので、質問しやすかった。
楽しく学習できるので ただきくだけよりも 印象に残りやすい
と思いました。きいたことを 次は 自分で 教えることで
理解が深まると思いました。

教え合うことで お互い教えたり、聞いたり、理解し合える
ことはいいなと思いました。班をかえて 自分が他の班の人に
伝えるというのも、教えられたことを自分の言葉で伝えられるので
自分でちゃんと理解したか 伝えることで 確かめられるのが
いいと思いました。

自分から先生に教えてもらったことを班のみんなに教え
てみんながわかってくれるととてもうれしかった。みんなで
教えあう授業は先生の話をきくだけより意欲がわく。

（資料 14　グループ学習後の生徒の感想）



（資料 15　学習形態に関する
アンケート結果）
「どちらの学習形態が文法理解に
つながりやる気になったか」

（３）＜手だて３＞　協働学習による教科書本文の内容読解

資料 16 は協働学習を通じて本文の内容読解をした後の生徒の感想である。

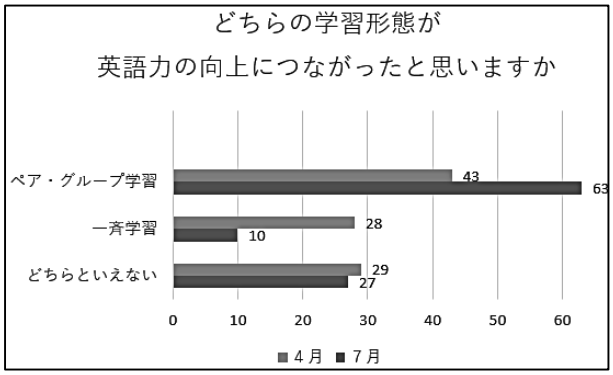
みんなで話しあったりするのには、時間がかかるけれど、みんなで話し
あって、ここがちがうだとか、こうじゃないだとか、をいいあって、
すごい頭に入りやすかったし、また いろんな人からの説明をきいて、
いろんな説明のしかたで、さらに、分かったきがする。

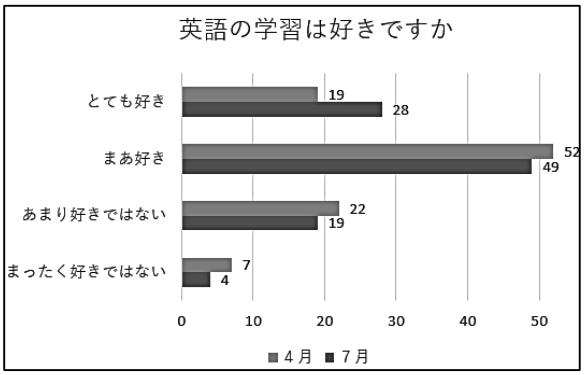
楽しみながらできるし、みんなで話しあってできるから、
自分のまちがいを教えてもらったり、友達に教えてあげ
たりすることで、ただ聞くだけの授業よりも印象に
残りました。

（資料 16　協働学習を通じて本文の内容読解をした後の生徒の感想）

「理解が深まる」「自信がもてる」という感想が多くの生徒からみられた。全員が自分のグループの生徒に教えなくてはならないという責任感をもってとりくんだことから，協働学習に意欲的にとりくめたことがわかる。さらに一斉授業の際には，個人的に教員に質問する時間を作るのは難しいが，協働学習では，生徒どうしだけではなく，教員に対しても直接質問

しやすい環境になり，積極的に質問する生徒が増えるということにもつながった。今回の手だてでは，教えるという責任を伴う活動の中で行ったため，自ら学ぶ必要性が生まれた。そして一人では解決できないため,ペアで話し,意見を共有して答えを導き出したことにより，学習効果は高まったと考える。資料 17 から，理解が深まったことにより，自信をもつ生徒が増え，英語学習に対する気持ちが高まったことが読み取れる。





（資料 17　授業に関するアンケート結果）

６　今後の課題

今回は新出単語や文法を学び，本文の内容を読解する方法として，子どもたちが主体的に学ぶ姿勢を身につけ，他者と対話し協働するアクティブ・ラーニングの視点から授業を展開した。しかし，今後は，英語授業の中で学んだ単語・文法や文章を使って，自分自身のことや日常的な話題,社会的な話題に関して表現させる活動に結びつけていかなければならない。

また，外国語科の特性として，人間性を育てるという面があると考える。21 世紀型スキル（問題解決力やコミュニケーション力，協調性など）を効果的に育成するためにも，継続して「協働学習」を積極的に取り入れ，主体的・対話的で深い学びが実現できるようにしていきたい。